

特集 千樹萬幹 ⑤

小野陽太郎



寸心居士

京の庭師「植治」の小川治兵衛と白楊父子の名や業績を知る人は多い。しかし「植重」の佐野巨齋と越守兄弟を知る人は少ない。

巨齋は昭和二九年にニューヨークの近代美術館に日本庭園を作り、越守は京都屈指の数寄者、北村謹次郎邸の庭園「四君子苑」を作った。兄弟とも作庭の腕は抜群であったが個性も違い非常に不仲であった。

兄弟の父、栄太郎は一般に光悦垣と呼ばれている竹垣を作った。その垣は実は、うずくまる牛の背骨の湾曲をヒントに光悦寺に創作したものである。栄太郎の先代は重次郎と云い屋号「植重」の始まりであった。その以前も龍安寺の門前で庭師を代々していた。

龍安寺の石庭の塀際の石の一つには「小太郎清二郎」と刻まれているが、あるいはこれも「植重」の何代か前の兄弟が何かの由縁で彫ったのかも知れない。石庭の方丈の東庭に龍安寺垣を創作したのも巨齋である。低い石垣上に仕切られた竹垣は「仕切って仕切らず」巧妙なる工夫と評された。光悦垣と龍安寺垣には佐野家の伝統「創作の精神」が受け継がれている。巨齋は「寸庭」という言葉も創作した。坪庭、小庭、露地等に対して称えたのであるが、一寸四方即ち「方寸」から発した言葉であり同時に「こころ」を意味する。

武者小路実篤は巨齋の作庭精神に感動して「寸庭舎」と巨齋の前で揮毫した。一時は植治をしのぐ勢いであった「植重」の佐野兄弟が逝って久しい。

晩秋の龍安寺の墓地に巨齋の墓を訪ねた。小さな石碑に「寸心居士」とあり、越守の墓も仲良く並んでいた。夕暮の空に真っ赤に熟れた柿の実が梢に一つ…。巨齋がもの言わぬ石になるまでに会って直接話を聞きたかったと、しみじみ思った。哲学者西田幾太郎博士の戒名も同じ「寸心居士」であった。